

国語

(時間 五十分)

受験番号

【注意事項】

- 1、試験開始の合図があるまで、問題冊子の中を開いて見 はいけません。
- 2、指示があつたら、解答用紙を問題冊子から取り出し、解答用紙の決められた欄に配られたシールをはりなさい。はり終わつたら、解答用紙をすみやかに問題冊子の中に戻しなさい。
- 3、試験開始の後、受験番号を問題冊子・解答用紙の決められた欄に、氏名を解答用紙の決められた欄に、それぞれ記入しなさい。
- 4、問題文には、原文(原作)の一部を省略したり、文字づかいや送りがなを改めたりしたところがあります。
- 5、答えは解答用紙の決められた箇所かしよに記入しなさい。
- 6、問題は十七ページあります。問題が抜けている場合、印刷がはつきりしない場合は申し出なさい。
- 7、何か用事ができたときは、だまって手をあげなさい。ただし問題の内容についての質問をしてはいけません。
- 8、試験終了の合図があつたら答えを書き続けてはいけません。すぐに筆記用具を置いて解答用紙の回収を待ちなさい。
- 9、問題冊子は持ち帰ってかまいません。

次の——線部①～⑧のカタカナの部分漢字で、⑨・⑩の漢字の部分ひらがなで書きなさい。いずれも一画一画をていねいに書くこと。

参列者が氏名をキチヨウする。①

電源のフツキュウ作業を行う。②

本のインゼイを受け取る。③

電車の運転士がケイテキを鳴らす。④

地図のシユクシヤクが大きい。⑤

おミヤゲに果物を持参する。⑥

ネンピの良い車を買求める。⑦

被害者ひがいしゃに対するシヤザイの気持ちを表す。⑧

昔の名残をとどめる。⑨

早朝の快かい風ふうを全身に浴びる。⑩

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

戦争が泥沼化し緊迫の度を増してくるなか、「私」（琴子）の通う都内の学校では集団疎開についての緊急の集会が開かれ、疎開の申請期限は二日間とされた。疎開とは空襲による被害を少なくするため、都会に集中している住民を地方に分散することである。

「疎開に行くって決めた？」

翌朝ユキちゃんがうちに訪ねてきて、わざわざ私を表に呼び出した。

「あたりまえじゃない」

私はうそをついた。

「集団疎開？」

「それ以外何があるのよ。ユキちゃん、もしかして迷ってんの？」

「わたし、行きたくないのよ。田舎は不便だし、蛇口からお水も出ないっていうよ。蛇や虫も苦手だし、すぐお腹はゆるんじやうし、嫌なのよ」

「あんた……そんなこと言っつて、大丈夫？」

私がさも大げさに四方を見回すと、ユキちゃんは怯えたようにうつむいて、もんぺのひもの端を指先でつまんで、落ちつかぬ様子でしごきはじめた。

「兵隊さんがどんな思いで戦ってるか知ってるの？　うちのお兄ちゃんだってね——」

「そりゃ悪いと思っつてるけど、お母さんや弟と離れるなんて、考えられないよ。わたしだけ助かったつて、お家や家族が焼けちゃったら、生きていけるわけないもの。なのに、もうお父さんにハンコつかれちゃった」

衝撃が走った。先を越された。うちのゴタゴタを知っつていて、自慢しにきたのか？

「みんなで共倒れになるよりは由岐子だけでも、だなんて、お父さんは無責任」

そう言っつてユキちゃんはふにゃふにゃと泣き出した。泣きたいのは私の方なんだよ。

▼「これは強制ではないんだから。あくまで各家庭の自主性に任せられている。集団疎開したいのでお願いします、と頼む家が申請を出すんだ」

「それはお父さんの考え。あたしはお願ひしたいのです」

その晩、食卓を挟んでまたもや私は父と睨み合った。

「すると何があつてももう人のせいにはできなくなる。自ら選んだことだから」

「人のせいになんてする気ないもの。この国が勝つまでのたった半年のことじゃありませんか。少国民は聖戦完遂のために疎開をするの。アジアの仲間を欧米列強の毒から解放して、大東和共栄圏を守るため、私はみんなと一緒に、銃後で鍛錬する疎開戦士になりたいの」

「そういう受け売りの言葉は僕にはわからない。ソカイセンチ、とはなんだ。肥の匂いのする田舎でさみは何と戦う。カエルと相撲でも取るかい」

注1 銃後→直接戦闘に加わっていない一般国民。または、戦場となっていない国内。

父の言葉はゆっくりとして静かなままだが、瞳は私を射抜くように見つめ、その白い額の皮膚には、脈打つように血管が浮いている。父は私を牽制するとき、名前や「おまえ」と呼ぶのをやめ、冷たく「きみ」と言った。父にそう呼ばれると私の肌はあわだつた。

「お父さん、じゃあそれをそのまま先生の前で言つてよ。私たちは学校でそういうふうに習っているの。教えられたように考えないと、先生に怒られちゃうの。うちのお父さんがこんなふうに言いますから、なんて言つたら、おまえの家族は非国民だ、なんてみんなの前で言われて、大変なことになるの。そしたらあたしはどうしたらいいの？ お父さんは楽だわ。あたし一人を相手に、家の中で皮肉を言えばいいだけだもん」

「……そうだな。それは言う通りだ。きみたちは難しい時代に生きている」

そう言つて父は、目を伏せた。▲

自分はまるでその時代に生きていないように、ひと事らしくものを言う父が憎らしかつた。しかし私も本音を言えば、すべて自分の体裁の問題なのである。あの泣きみそのユキちゃんですら、集団疎開組なんだもの。そのユキちゃんに、行つて言つてしまつたんだもの。だからいまさら実は東京に残るか、縁故を頼るだなんて、とてもじゃないけど言えませぬ——とは言えなくて、

「みんなで共倒れになるよりは、と思わないの？」

と、ついでにもう一つ受け売りの言葉。

父の顔が歪んだ。しまった。これは口が滑つた。

「あなたを私たちと共倒れにさせようなんて、思つちやいないわ」

横から母がたまらず言葉を挟んだ。違つ、これは私が思つたことじゃなく、ユキちゃんのお家の人が——けれど私の口は、滑りはじめると止まらない。

「あたしだって、何かの役に立ちたいんです。男の子に産んでくれてれば、兵隊になれたのに。お国のために立派に死ねるのに」

②「そういうことを言うおまえこそ、僕たち親を裏切っている」

低く絞り出す父の声には、私の体を切り裂いても足らぬほどの怒りがにじんでいるように思えた。

私たちをすし詰めにして、汽車は動き出した。

見送りのホーム側の窓から子供たちが身を乗り出して、客車は片側の車輪が線路から浮くのではないかと思うほど傾いていた。私の頭上でめちやくちやに帽子を振る子の肘で突つかれながらちらりと外を見ると、万歳をくり返す人だかりの中の母がじつと私だけを見つめていた。私は目の玉を寄せ、舌の先をあごにつくほど長く伸ばして母に手を振つて見せた。寄せていた目を戻したところには、群衆の影はもう遠くなり、母の姿はわからなくなっていた。鼻の奥に、銘仙にしみついた樟脳の匂いがつんとよみがえつた。

結局父は、私の説得によつてではなく、しめ切りがすぎて三日後の夕方に家にやってきた担任の曾根

注2 牽制く相手に圧力をかけて押さえつけること。

注3 銘仙く安価で丈夫な絹織物。

注4 樟脳く防虫剤などに用いられる薬剤。

先生の説得に応じるかたちで申請書に判子をついた。各家庭の自主性に任せる、というのが単なる建前だということ、ブラウスを汗でぐっしり濡らして玄関に立った曾根先生の差し迫った顔をみれば明らかだった。押し黙った両親の前でとぎれとぎれに語る先生の若い声は、客間の壁越しに聞き取るにはか細すぎたが、誰かからふきこまれたらしい「愛情のしるし」という言葉だけが幾度か鮮明に発されたのはわかった。

父は、国の勝利のためでもなく、東京を戦火から守る気迫もなく、まして曾根先生の説得に心を打たれたからでもなく、ただかたちどおりに私への愛を試されて、自らの考えを転がした。安全な疎開地に我が子を送り込まないのは、親としての愛がない、と喉元に細い刃を当てられたのが決め手になった。

「私には私の愛が」と言い返すことはなかった。父は、負けたのだ。

けれど父の敗北は、その時はしまったことではない。

父は音楽学校で西洋音楽の講師をしながら、交響楽団やレコード録音で演奏するピアノやクラリネットの奏者であった。敵性音楽として英米由来の音楽に規制がかかりはじめた後も、クラシック音楽の多くは同盟ドイツ、イタリアの作曲家のものが多かったため、父は変わらず教壇に立ち、演奏会にも出て、その生活に大きな変化は起こらないように思えた。しかし、開戦以来私たちの気分が寄り添い、心を掴んでいたのは、父の専門分野ではなくもっぱら行進曲や軍歌、戦いを鼓舞する流行歌だった。ラジオをつければ、映画館に行けば、著名な作家による歌詞や曲に、人気の歌手が声を張り上げ、はるか遠くの戦況について教えてくれ、英雄たちをたたえた。沸き立つような高揚と一体感。自分たちはひとつ。同じ目標に向かって難局を突破し、弱きものと立ち上がり、虐げられたものを救い出し、身を挺する仲間同士、と思うと、自然に口が動き、リズムを取り、涙があふれ出ていた。劇場で隣り合わせた見知らぬ人とも手を取ってひと抱き合いたいような気持ちだ。世界が今まさに変わりつつある。自分たちが、変えて行く。すすめ。すすめ。私はなんていい時代に生まれたんだろう、と脳みそが痺れた。誰から歌えと強いられたわけじゃない。もつと、もつともつと、もつと歌いたい。もつと激しい、もつと震える感動を！ そんな私たちの渴きに応えるように、軍歌は次々と量産された。音楽は私たちをひとつにする。音楽は役に立つ。音楽は儲かる。レコード会社は競い合い、新聞社は高い賞金を掲げて歌詞を公募した。そのうち名の知られた作曲家ばかりでは追いつかなくなり、父のところにも作曲の依頼がくるようになった。

父は反戦論者などではなかった。お世話になった先輩や、レコード会社の人たちに頼まれて、やってみましょう、と引き受けた。猛々しく血なまぐさい歌詞も、父にとっては音とリズムの並びでしかなく、それに対する忌避も傾倒もとくにない様子だった。曲を書けばそれなりのお金になって、良い副収入となった。母は建具屋さん呼び、開閉がむつかしくなっていた納戸の戸を直し、父は前の年に歯医者で表で盗まれたまま諦めていた自転車を新調した。

はじめのうちは、単純なものだ、僕などにも書けるのだから、と父は笑っていた。

注5 鼓舞するはげまし、奮い立たせる。

注6 身を挺する自ら進んで自分の身体を差し出す。

注7 忌避も傾倒も嫌がることも熱中することも。

注8 納戸は衣類・調度品などをしまっておく部屋。

「そもそも難しくしてはならないんだ。そういうものを求められていないのだから」
自分の本分は別にあると思つていたので。演奏会に出て、時が止まったようにブラームスやシューベ
ルトを弾く。

しかし、いくつも曲を書く仕事を重ねていくうちに、父の中にも片手間にできなくなる瞬間がやって
きた。作曲に工夫を凝らし、基本に立ち返り、自分の思う理想を創り上げようと欲求がめらめらと
立ち昇つてきたのだ。それはしかし、レコード会社の役員たちにはことごとく不評で、「伝わりづら
い」もつとわかりやすく、激しく胸を突くメロディを」と修正を求められた。

父は、自分が歴史に名を残すような芸術家でないことくらい知つていた。何も軍歌に変革を起こそう
などと大それたことを考えたわけもないだろう。ただ、ものをこしらえる人の内側には、我が手で編み
出すものを自らの信じる「善きもの」へと導かずにはいられない、あどけないほどの渴望と、まっ白な
衝動がある。自らの目が、耳が、ひとたび「否」と暴いてしまえば、誰にどんなに喝采を浴びたとして
も、その手に立ち戻り、終止符を打つことは耐えがたいのだ。

父はすっかりそれら時局的な音楽の仕事に、光を失つてしまった。自身が信じる「善きもの」と、求
められるものの圧倒的な溝の深さに失望し（また、その溝を決して埋めることの叶わない、父自らの作
曲の手腕に対して）、軍歌そのものを単純だなどと評することもなくなった代わりに、自分がこしら
えたものについて私たちに語ることもなくなった。それでも頼まれた作曲や演奏の仕事は続けていたよ
うだ。それは、我が家にまだ直さなければならぬ建具があるからではなく、もう一台自転車が必要
だったからでもない。ただ父は、抗うことの煩わしさに背を向けたのだ。音楽のことしか考えてこな
かった自分のような人間が、大きな流れのさまたげになることなどできないと思ひ込んでいた。さまた
げて抗うには、あまりに軽すぎる。弱すぎる。ただ、美しい音の調べの行き来しか知らない、^④浮薄な
蝶。

あらゆる娯楽や芸術が贅沢で不徳なものとして敵視されていく世相のどさくさで、音楽人たちは「こ
の国の音楽の灯を絶やさぬために」という殺し文句を発明した。国威発揚のための音楽の量産や演奏に
協力するのは（断じて金儲けではなく）音楽家共通の責務である、という大義名分が完成されていく中
で、父は反発も拒絶も試みぬままに、ただ、自分の本意ではないものを、人から無理に押し付けられて
いるという弱々しい幻想に浸つていた。しかし、退屈で、やりがいがなく、誇りを傷つけられる日々と
引き換えに、そんな目にあうのは自分のせいではなく、不本意ながらそうせざるを得ない状況のせいだ
という、気楽な諦観を手に入れたのだ。

そんな父をよそに、私はラジオから聞こえてくる軍歌を揚々と口ずさみ、耳で覚えた伴奏を父のピア
ノでじゃんじゃか弾き鳴らしたりしていた。中には知らず知らず、父の作った曲を歌つていたことも
あったかもしれない。

父の憂鬱をそつと汲んでいたのは兄だった。父が仕事から戻るころになると、兄はさりげなくラジオ
を消した。私が抵抗すると、「課題があるから」と言つて、バイオリンを取り出した。兄にバイオリン

注9 ブラームスやシューベルトより有名な西洋の音楽家。パガニーニ、メンデルスゾーン、サン＝サーンス、サラサーテも同様。

注10 国威発揚の国の威力を盛んにして周囲の国に示すこと。

注11 諦観をあきらめること。

を取り出されてしまうと、うちではもう術がない。バガニーニ、メンデルスゾーン、サン＝サーンス、サラサーテ、そして父が帰宅するときにはいつもうっすらと、兄の奏でる様々な曲が家の中に流れていた。^⑤「しかしまあ、よく飽きもせず練習するね」と父は苦笑いしながら着替えを済ませ、幸福そうに居間の揺り椅子に身を沈めていた。

私の集団疎開の件において、父は今度こそ「**A**」というものが実にどこまで貫けるのか、試してみようとしていたのかもしれないが、最後はやはりあっけなく、「**B**」という鎮痛薬に手をかけた。戦わずして負ける苦々しさは知っていたかもしれないが、逆らって、いじめられて、無駄死にしても悔いはないと言いつけるほどの強固な思惑が父の内側にならないこともすでに明らかだった。そして、「東京が火に飲まれたとき、せめて我が子だけでも助けるための親の愛」という名目のもとに合意したのであるが、私は望み通り疎開地行きの汽車に乗れたにもかかわらず、父に捨てられたような気がしていた。

いつの間にか日は暮れ、客車の中は興奮のつぼと化していた。行先は宮城県の山あいの村と聞いていた。森や田んぼや美しいせせらぎに囲まれて、川では手づかみで魚が獲れ、山にはあちこちに木の実がなり、温泉が湧き出す場所もあるという。誰もが父母と別れた感傷も忘れ、大掛かりな修学旅行に出かけて行くような気分だった。さつきまで母親にしがみついていたユキちゃんさえ、家から持たされたバスケットをうれしげに配りながら、小鳥のような声を上げて友人ともみ合っている。一晩中おしゃべりしよう。向こうに着くまで絶対に寝ない。朝まで起きてられるもの。いや寝るね、いや寝ないね、寝たらどうする？ これよりもっといいものあげる。いいものって何。いいものはいいいもの^⑥ 私は、なぜかその輪には入ることができず、ひとり通路を隔てた座席の窓際で、うとうとしはじめた。レールの上を廻る車輪が、終わらないワルツのようなりズムを刻んでいる。

(西川美和「うつろいの秋」による)

問一 —— 線部①「泣きたいのは私の方なんだよ」とありますが、なぜですか。その理由としてもっとも適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「私」が父親と意見が合わずに言い争いをして疎開を決められないでいる間に、先にユキちゃんはその望み通りに父親から承認をもらって疎開を決めたことがねたましかったから。

イ ユキちゃんは疎開には行きたくないという弱音を吐くことで気持ちを晴らすことができるが、「私」はユキちゃんに対してであつても疎開には行きたくないという本音を言えないから。

ウ ユキちゃんの父親が子どもだけ疎開させて、親としての義務をはたさないほど無責任である以上、「私」の父親は娘の思いを無視して自分の考えだけで疎開させるほど無責任だから。

エ ユキちゃんは家族と離れて疎開などしたくないと思つているのに勝手に父親に疎開を決められて苦しんでいるが、「私」は「私」で父親から疎開することが認められなくて困っているから。

問二 本文の▼ ▲ではさまれた部分から読み取れる、父親に対する娘の心情をまとめたものとしてもっとも適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 父親がこだわっているのは、娘の安全などではなく自らの体面であり、心の底では何があつても命だけは助けてほしいと願つている娘の本心を無視して論理をふりかざす父親の姿勢に娘はさびしさを感じている。

イ 父親が、受け売りの言葉を使う娘に対して、理屈に基づいた持論を展開することで冷静な判断を求める一方で、娘はその父親の言葉に冷たくあしらう姿勢を感じ取つて疎外感といらだちを感じている。

ウ 父親は、娘のことを誰よりも愛しているとつても結局は他人を言い負かすことを優先し、娘は、受け売りの言葉を借りても国のために役立ちたいという思いを父親がくみとつてくれないことにいきどおっている。

エ 父親が、他人の意見をあらゆる角度から検討し折り合いをつけるふりをして、論破することだけに集中するあまり、娘の主張に全く耳を傾けず娘の言葉は無視し続けることに対して、娘は無性に腹が立っている。

問三 —— 線部②「低く絞り出す父の声には、私の体を切り裂いても足らぬほどの怒りがにじんでいるように思えた」とありますが、このときに「父」はどのようなことに対して「怒り」を覚えていますか。五十字以上六十字以内で答えなさい（句読点・記号も一字に数えます）。

問四 —— 線部③「父は、負けたのだ」とありますが、このときの「父」の「負け」とはどういうことですか。その説明としてもっとも適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 親として子どもを手放す気がなく、都内で同居し続けようとしたのに、子どものためには集団疎開を認めるべきという主流の意見を受け容れざるをえなかったこと。

イ 都内で家族が同居することの正当性にあくまでこだわり、集団疎開をすすめる学校関係者に理解させようとしたが、説得力のある曾根先生の発言に降参したこと。

ウ 家族の同居のためには周囲に働きかけようとは考えていたが、落ち着きのない表情をした曾根先生の立場を心配し、持論の主張を取り下げたこと。

エ 当初は家族の同居が子どものためになると考え、集団疎開に否定的であったが、娘の将来を真面目に考えた結果として従来の考えを改めたこと。

問五 —— 線部④「浮薄な蝶」とありますが、その具体的な説明としてもっとも適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 時代の中で人々から非難をうけてでも自分が美しいと信じる曲を作ることは早々にやめ、人々の戦意を高めて国家体制を支える作曲で生計を立てることに重きを置き、軽やかに現実に順応した父の様子を蝶にたとえている。

イ 戦時下で人々に評価される人気の高い曲よりも芸術性の高い曲を作ることしか関心を持たず、世間の人たちに支持されるような作曲活動に背を向ける現実離れした父の姿をふわふわ飛ぶ虫にたとえている。

ウ 音楽家としての生き方を譲らず軍歌であっても自分の望む出来を追求していた父が、戦争のための曲が求められていく時代に流されて、作曲を通じた音楽の理想の実現をあきらめて現状を容認してしまう様子を皮肉っている。

エ 世間からもてはやされ、戦時下の国家のためになる曲で収入を得て戦時下でも豊かな生活を求めると同時に、音楽として自分が「すばらしい」と心底思える曲を作ること追求するようなどっちつかずの父を鋭く批判している。

問六

——線部⑤「しかしまあ、よく飽きもせず練習するね」とありますが、このときの「父」についての説明としてもっとも適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 戦時下の音楽をとりまく状況をよしとしていなかった父は、時局に合わない曲を演奏する息子に対して表面上はあきれた風をよそおいつつも、音楽の美しさを追い求める姿勢に実は共感を覚えている。

イ 軍歌に親しんで戦時体制に順応している娘とは対照的に、芸術家としての本分にこだわる父は、時局におもねらずに軍歌そのものの演奏技術の向上に努める息子に対して違和感を覚えている。

ウ 人々が熱狂する軍歌などにはわき目もふらず専門性の高い曲の練習にひたすら打ち込む息子に、芸術としての音楽をひたすら追求しつづける自分の後継者こうけいしゃとしての姿を見出し安心感を覚えていている。

エ 時代の流れの中で娘が楽しそうに軍歌を歌う姿も、芸術家としてバイオリンの演奏に精を出して自分の道を追い求める息子も、それぞれの立場で音楽を愛している状態に対して幸福感を覚えていている。

問七

——A B に入る言葉としてもっとも適切なものを、次のア～エの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

A ア 正義 イ 世間体 ウ 大義名分 エ 自主性

B ア 不本意ながら イ 善きもの ウ 非国民 エ そもそも

問八 — 線部⑥「私は、なぜかその輪には入ることができず」とありますが、なぜですか。その理由

としてもっとも適切なものを、次のア、イ、ウの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 疎開に異議を唱え続けていた父の冷たい態度に対して反発心がある一方で、父の作品には愛着を感じていたが、それを本人に伝えられなかったことに加え、見送りに来てくれた母とも素っ気ない形で別れたため、それぞれの親との別れ際に素直に感情を表していた子供たちの満ち足りた表情を見ることで、後ろめたい気持ちが生まれてきたから。

イ 意地っ張りな父と口論をしてまで自分の信念を貫いた結果として疎開することになったが、時代の波に流されて右往左往する周囲の大人たちや、そのような大人たちの言動を信じ切り、車内で楽しいげにさわぐ子供たちの幼い様子を冷静に見ることで、今までの疎開に対する信念や、自分が生きている社会の行く末に対する疑問が生じてきたから。

ウ 疎開の希望は通ったものの、それは父が持論を変えて時局に応じた結果であるため、失意を感じていたのに加え、周りの子供たちがそれぞれの親の存在を支えにして慣れない土地での共同生活に期待を持ち、車内ではしゃいでいるように見えるのとは異なり、理解し合えたという実感を持ってないままに自分の親と別れたことが心残りだったから。

エ 強情な父が最後に折れることによって疎開は実現したが、音楽活動が続ける父や、見送りの時に銘仙を着ていた母の姿が思い出され、都内に残した親の安否が気になる一方で、それぞれの親との別れを忘れて旅行気分ですぐ車内で遊ぶ子供たちを見ると、銃後で国を支える役割をみんなで協力して果たすことができるのかどうか不安になったから。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

▼情報社会と言うと、絶えず情報が新しくなっていく、変化の激しい社会をイメージする人が多いかもしれませんが。しかし、私の捉え方はまったく逆です。情報は動かないけれど、人間は変化する。これを理解するために、私がよくもち出すのがビデオ映画の例です。

たとえば同じビデオ映画を、二日間で十回見ることを強制されたとしましょう。一種類の映画を二日間にわたって、一日五回、続けて十回見る。そうすると、どんなことが起こるでしょうか。

一回目では画面はどんどん変わって、音楽もドラマティックに流れていく。映像は動いていると思うでしょう。二回目、三回目あたりは、一度目で見逃した、新しい発見がいろいろあるかもしれません。そして「もつと、こういうふうにしたら」と、見方も玄人っぽくなってきます。

しかし四回目、五回目になると、だんだん退屈になるシーンが増えてくる。六、七回目ではもう見続けるのが耐えがたい。「なぜ同じものを何度も見なきゃいけないんだ」と、怒る人も出てくるでしょう。ここに至ってわかるはずです。映画はまったく変わらない。一回目から七回目まで、ずっと同じです。では、何が変わったのか。見ている本人です。人間は一回目、二回目から七回目まで、同じ状態で見ることができません。

ここまで書けば、もうおわかりでしょう。情報と現実の人間との根本的な違いは、情報はいつさい変わらないけれど、人間はどんどん変わっていくということです。

しかし、人間がそうやって毎日、毎日変わっていくことに対して、現代人はあまり実感がもてません。今日は昨日の続きで、明日は今日の続きだと思っっている。そういう感覚がどんどん強くなってくるのが、いわゆる情報社会なのです。

どうしてか。現代社会は、「a=b」という「同じ」が世界を埋め尽くしている社会だからです。記号や情報は作った瞬間に止まってしまおうのです。

テレビだろうが動画だろうが、映された時点で変わらないものになる。それを見ている人間は、本当は変わり続けています。でも、「自分が変わっていくという実感」をなかなかもつことができない。それは、私たちを取り囲む事物が、情報や記号で埋め尽くされているからです。

困ったことに、情報や記号は一見動いているように見えて、実際は動いていない。だから余計に、人間は自分の変化を感じ取りにくくなるのです。▲

(中略)

私が大学に入学する頃、世間には大学に入るとバカになるという「常識」がありました。こうしたことを言うのは、世間で身体を使って働いている人たちでした。そうした発言の真の意味は、いまではまったくわからなくなってしまうかと思えます。座って本を読んでいると、生きた世間で働くのが下手になってしまふ。これはそういう意味だったはずです。こうした記憶があるから、私はいまでも身体を多少でも動かすのです。

座って机の前で学べることもたしかにあります。しかし応用が利くことは「身についた」ことでしかあり得ません。

① 日本の教養教育がダメになったのも「身につく」ことをしなくなったからでしょう。

私が東京大学出版会の理事長をしていた時、一番売れたのが『知の技法』という本です。知を得るのに **A** 一定のマニュアルがあるかのようなものが、東大の教養学部の教科書で出て、ベストセラーになりました。

しかし、教養はまさに身につくもので、技法を勉強しても教養にはなりません。ただ勉強家になるだけですが。それを昔は「**暈**が腐るほど勉強する」と言いました。それでは運動をコントロールするモデルは脳の中にできあがりません。

知識が増えても、行動に影響がなければ、それは現実にはならないのです。江戸時代には陽明学というのがありました。当時の官学は朱子学で、湯島聖堂がその本拠地です。

林大学頭という東京大学総長のような先生がいて、暈の上に座って、先生の講釈を聞く。朱子学にはそんなイメージがあります。

陽明学はそれとは違います。知行合一を主張する。知ることと、行なうことは一つだ、一つでなければいけない。ここで言う知は文であり、行は武のことですから、文武両道と知行合一は同じことを言っています。

一般に、知ることは知識を増やすことだと考えられています。だから「武」や「行」、つまり運動が忘れられてしまう。

知ることの本質について、私はよく学生に、「自分ががんの告知をされたときのことを考えてみなさい」と言っていました。「あなたがんですよ」と言われるのも、本人にしてみれば知ることです。「あなた、がんですよ。せいぜい保って半年です」と言われたら、どうなるか。

宣告され、それを納得した瞬間から、自分が変わります。世界がそれまでとは違って見えます。でも世界が変わったのではなく、見ている自分が変わったんです。つまり、知るとは、自分が変わることなのです。

自分が変わるとはどういうことでしょうか。それ以前の自分が部分的に死んで、生まれ変わっていることです。

『論語』の「朝に道を聞かば夕べに死すとも可なり」という言葉があります。朝学問をすれば、夜になつて死んでもいい。学問とはそれほどにありがたいものだ。普通はそう解釈されています。でも現代人には、ピンとこないでしょう。朝学問をして、その日の夜に死んじゃったら、何の役にも立ちませんから。

私の解釈は違います。学問をするとは、**C** が落ちること、自分の見方がガラッと変わることです。自分がガラッと変わると、どうなるか。それまでの自分は、いったい何を考えていたんだと思うようになります。

前の自分がいなくなる、たとえば「死ぬ」わけです。わかりやすいたとえば、恋が冷めたときです。なんであんな女に、あんな男に、死ぬほど一生懸命になったんだろうか。いまはそう思う。実は

注1 文武両道は本文での「文」は「本を読んだり人と会ったりして頭に入力すること」、「武」は「入力情報を総合して出力すること、運動すること」の意味で使われている。

一生懸命だった自分と、いまの自分は「違う人」なんです。一生懸命だった自分は、「もう死んで、いない」んです。

人間が変わったら、前の自分は死んで、新しい自分が生まれていると言っていいでしょう。それを繰り返すのが学問です。ある朝学問をして、自分がまたガラッと変わって、違う人になった。それ以前の自分は、いわば死んだことになりました。それなら、夜になって本当に死んだからって、いまさら何を驚くことがあるだろうか。『論語』の一節は、そういう反語表現だというのが私の解釈です。正しいかどうかはわかりません。

確固とした自分があると思込んでいるいまの人は、この感じがわからない。 **D** 変わることはマイナスだと思っています。私は私で、変わらないはず。だから変わりたくないのです。それでは、知ることはできません。

でも、先に書いたように、人間はいやおうなく変わっていきます。どう変わるかなんてわからない。変われば、大切なものも違ってきます。だから、人生の何割かは空白にして、偶然を受け入れられるようにしておかないといけません。後述しますが、人生は、「ああすれば、こうなる」というわけにはいきません。

現代の人たちは、偶然を受け入れることが難しくなっています。なぜか。都市化が進んできたからです。私の言葉で言えば「脳化」です。

戦後日本の特徴を一言で言えば、都市化に尽きます。戦後の日本社会に起こったことは、本質的にはそれだけだと言ってもいいくらいです。^③ 都会の人々は自然を「ない」ことにしています。

木や草が生えていても、建物のない空間を見ると、都会の人は「空き地がある」と言うでしょう。人間が利用しない限り、それは空き地だという感覚です。

空き地って「空いている」ということです。ところがそこには木が生えて、鳥がいて、虫がいて、モグラもいるかもしれない。生き物があるのだから、空っぽなんてことはありません。それでも都会の人にとっては、そこは「空き地」でしかないのです。

それなら、木も鳥も虫もモグラも、「いない」と同じです。なにしろ空き地、空っぽなんです。要するに木が生えている場所は、空き地に見える。そうすると、木のようなものは「ないこと」になってしまうわけです。

(中略)

岡山県の小さな古い神社で、宮司さんが社殿を建て直したいと思いました。その宮司さんが何をしたかという、境内に生えている樹齢八百年のケヤキを切って売った。その金で社殿を建て直しました。八百年のケヤキを保たせておけば、二千年のケヤキになるかもしれません。大勢の人がそれを眺めて心を癒すことでしょう。でも、それを売ったお金で建てた社殿は、千年はぜったいに保ちません。これがいまの世の中です。

社会的・経済的価値のある・なしは、現実と深く関わっています。いまの社会では、自然そのものに価値はありません。観光業では自然を大切にしていると言いますが、それはお金になるからです。お金にならない限り価値がないということは、それ自体には価値がないということです。なぜ価値がないか

というと、多くの人にとって、自然が現実ではないからです。現実ではないものには、私たちが左右されることはありません。つまり、現実ではない自然は、行動に影響を与えないのです。

不動産業者にとっても、財務省のお役人にとっても、地面に生えている木なんて、切ってしまうだけのものです。誰かに切らせて、更地さらちにする。どうして切るかということ、本来「ない」はずのものだからです。

そこに木が生えているから、家の建て方を変えよう。川や森があるから、町のつくり方を工夫しよう。そう思うなら、木や川、森はあなたにとって現実です。でも、更地にする人にとっては、木は「現実ではない」。現実ではないのですが、実際には生えていますから、邪魔物扱いじゃまものあひをして切ってしまう。まさしく木を「消す」のです。

頭の中から消し、実際に切ってしまったって、現実からも消すのです。不動産業者もお役人も、自分が扱っているのは「土地そのもの」だと思っている。土地なんですから、更地に決まってるじゃないですか。E 地面の下に棲すんでるモグラや、葉っぱについている虫なんて、まったく無視されます。

「現実ではない」からです。

こういう世界で、子どもにまともに価値が置かれるはずがありません。子どもの先行きなど、誰もわからないからです。子どもにどれだけの元手をかけたらいいかなんて計算できません。さんざんお金をかけても、ドラ息子になるかもしれない。現代社会では、そういう先が読めないものには、利口な人は投資しません。だから、自然と同じように、子どももいなくなるのです。

いや、子どもはいるじゃないか。たしかに、子どもはいます。しかし、それは空き地の木があるのと同じです。いるにはいるけれど、子どもそれ自体には価値がない。現実ではないもの、つまり社会的・経済的価値がわからないものに、価値のつけようはないのです。

木を消すのと同じ感覚で、いまの子どもは、早く大人になれと言われていきます。都市は大人がつくる世界です。都市の中にさっさと入れ。そうすれば、子どもはいなくなりますから。

都会人にとっては、幼児期とは「やむを得ないもの」です。はつきり言えば、必要悪になっています。子どもがいきなり大人になれるわけがない。でも、いきなり大人になってくれたら便利だろう。都会の親は、どこかでそう思っているふしがある。

ところが田畑を耕して、種を蒔まいている田舎の生活から考えたら、子どもがいるというのは、あまりにも当たり前のことです。人間の種を蒔いて、ちゃんと世話して育てる。育つまで「手入れ」をする。稲やキュウリと同じで、それで当たり前です。そういう社会では、^④子育てと仕事との間に原理的な矛盾むじがないわけです。具体的にやることも同じです。「ああすれば、こうなる」ではなく、あくまで「手入れ」です。

(養老孟司ようろうたけし)『ものがわかるということ』による

問一 筆者の考える「情報社会」とはどのようなものですか。本文の▼▲ではさまれた部分をふまえ、その説明としてもっとも適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 多くの情報が絶えず流動的に変化し、その変化に合わせてようと人間が変わり続ける社会。

イ 情報も人間もいつさい変わらないのに、絶えず大きく変化していると思いきまされる社会。

ウ 情報はそれほど変わらないけれど人間は変化し、一方で変化することを自ら嫌悪する社会。

エ 多くの情報に埋め尽くされるなかで、本来変わっていく人間の本质が意識されない社会。

問二 ——線部①「日本の教養教育がダメになったのも『身につく』ことをしなくなったからでしょう」とありますが、この一文についての説明としてもっとも適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 日本の教養教育は知識の伝授に偏^{かたよ}っていて、病気になったときのことを想像させるなどして危機意識を喚起^{かんき}しないことが問題である。
- イ 日本の教養教育は知識の伝授に偏^{かたよ}っていて、教育される人間の行動が変わるという段階まで至っていないことが問題である。
- ウ 日本の教養教育は知識の伝授に偏^{かたよ}っていて、武道やスポーツ、ダンスなどの体育教育が不十分であることが問題である。
- エ 日本の教養教育は知識の伝授に偏^{かたよ}っていて、学問体系の違いを身体表現とともに十分に教えていないことが問題である。

問三 B は、次のア～エの四つの文から構成されています。四つの文を論理的に並べかえ、その順番を、解答欄の形式に合わせて記号で答えなさい。

- ア 知が技法に変わったからです。
- イ どういうふう^{ふう}に知識を手に入れるか、それをどう利用するかというノウハウに、知というものは変わってしまった。
- ウ 技法というのはノウハウです。
- エ この本はなぜ売れたのか。

問四 C に入れるのにもっとも適切な六字の言葉を補い、「^あが落ちる」まで含めた慣用句を完成させなさい。

問五

——線部②「朝に道を聞かば夕べに死すとも可なり」とありますが、この言葉の「一般の解釈」と「筆者の解釈」の違いについての説明としてもっとも適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 普通は、朝、学問をすることができれば、夜になって死んだって構わないということと解釈し、筆者は、朝、学問をしている人間も夜には死んでしまうことがあり、確固とした自分などというものはこの世のどこにも存在しないのだと解釈している。

イ 普通は、朝、学問をしている人がその日の夜にあっけなく死んでしまうこともあるように、この世界は常に変化していると解釈し、筆者は、朝、真理を聞くことができればその日の夜に死んでも悔いがないくらい、教養は大切なものだとして解釈している。

ウ 普通は、朝、人間の生きるべき道を学ぶことができたならば、夕方死んでも心残りはないというのと解釈し、筆者は、朝、学問をして人間がそれまでと全く違う人になるとそれは死んだのと同じようなことなのであると解釈している。

エ 普通は、人間の生きるべき道を聞いて会得できれば、夕方死んでも心残りはない、ということと解釈し、筆者は、先のことはわからないのだから偶然や変化に対応できるように常日頃から余裕を持っているべきであると解釈している。

問六

A · D · E に入れるのにもっとも適切な言葉を、次のア～エの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。なお、同じ記号を二度以上用いることはありません。

ア むしろ イ あたかも ウ さすがに エ まして オ けっして

問七

——線部③「都会の人々は自然を『ない』ことにしています」とはどういうことですか。三十字以上四十字以内で説明しなさい（句読点・記号も一字に数えます）。

問八

——線部④「子育てと仕事との間に原理的な矛盾がないわけです」とありますが、そう言えるのはなぜですか。本文全体をふまえ、その理由を四十字以上五十字以内で説明しなさい（句読点・記号も一字に数えます）。

問九 次の会話文は、本文を読んだ生徒たちが「わかるということ」をテーマに、話し合っている場面です。本文の内容に合わない発言を、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 筆者が主張しているのは、体験学習の重要性なんじゃないかしらね。どれだけ本を読んでも、いくら言葉を尽くして説明してもらっても、実際に体験してみても学ぶことには及ばないわよね。百聞は一見にしかず、って昔から言うじゃない？

イ それに加えて、繰り返し体験することが大切、っていう話だよ。同じビデオ映画でも繰り返し見れば繰り返すほどそのたびごとに見逃した新しい発見がいろいろあるって言うってただらう？ 素人の見方から玄人くろうとの見方に、知は深まっていくんだよ。

ウ わかるといふことは暗記するといふだけではなく、その意味を理解して応用できるといふことだと思ふんだよ。変化に対応できるといふのは生きていく上で大切なことって言うていたよね？ 対応するためには応用できないと。

エ それからさ、自分が変わるためには、偶然を受け入れられるようにしておく必要があるとも言うているよね。筆者は、都市化のために偶然を受け入れることが難しくなってきたと考へているけれど、そうであれば、都市化によって「わかる」といふ体験を得にくくなっていると言えそうだね。

(以下余白)



